

父の残した昔日



君島恒星

暗闇の中でカタカタと頼りない音をたてて、8ミリフィルムが回りだした。シワのよったスクリーンに、色の薄くなったセピアっぽい映像が写し出される。そこには、数十年前の父の姿があった。そして、僕に対する宝探しのメッセージが記録されていたのだ。ちょっとしたミステリーが、僕たちの想像力を刺激する。その父の残した8ミリフィルムの謎を解いたのは、娘の麻衣だった。でもこのとき、父の仕掛けたゲームで、僕たち家族の生き方が変わるとは思ってもいなかった。

父と母が続けて亡くなった。

母は雪がちらつく2月に、父は母の葬式が終わるとすぐに発病し、後を追うように亡くなっていった。まるで男としての義務を果たしたかのようだった。

ふたりとも同じ大腸癌だった。

年寄りがふたりで暮らしていると、似たような体質になるのだろうか？ それとも、大腸癌になる何か、ふたりを襲ったのだろうか？

今になって思っても仕方がない。僕は、両親がどのような生活をしていたのかさえ知らない、親不孝な子供だったのだ。

僕はひとりっ子。

妻の直子と結婚した時、直子は両親と同居したいと言ってくれた。直子の両親は、子供の時に交通事故で亡くなっていたので、本心からのことだと思う。

しかし、母はそれを拒んだ。

「おまえや直子さんのことが嫌いで、こんなことを言っているんじゃないのよ。若い人たちと年寄りがひとつ屋根の下で暮らすと、誰かが我慢しなくてはならないでしょう？ 直子さんが我慢しているのを見るのは忍びないし、自分が我慢するのも苦手なの。直子さんの気持ちは有り難いけど、同居はしない方がいいんじゃないかしら？ でも遊びには来てくださいよ。この世で一番好きな人たちなんですから」

と...

父はその言葉にうなずいていた。昔から父は自由に仕事をしていたので、家庭は母にまかせ、めったなことでは意見は言わない。よほどのことがない限り、母の意見は絶対だった。

年寄りだけにしておきたくなかったが、別々に暮らすことを決心した。それに母の本心は、それまで仕事で家によりつかなかった自由奔放な父を、老後だけでも独り占めしたいのではないかと思っていたからだ。

娘の麻衣が生まれた時の、母の喜びは大変なものだった。1人目の子供を亡くしているのに、直子は精神的にも不安定だった。そのうえ難産だったので、まともな赤ちゃんを産めないのではないかと滅入っている直子に、母はつきっきりで元気づけてくれた。

産気づき、分娩台に何時間ものせられているのに、なかなか産まれぬ。医者が帝王切開に踏み切る判断をせまられた時、自力で麻衣が誕生した。直子は力んでいたせいか、目の回りが内出血をおこし、パンダのような顔になっていた。相当顔をゆがめていたのだろう。母は自分で産んだかのように涙を流して「よく頑張った。よく頑張った」と何回も直子に言っていた。

その年両親は、麻衣に海に見える田舎をつくるんだと、伊東に家を建てた。

僕は海よりも山の方が好きだった。

両親に言わせると、伊豆は山と海が同居しているところなのだという。遠回しに、僕のためにも伊東を選んだのだと言われているみたいだった。でも僕が好きなのは、もっと大きな山なのだ。といっても登山に明け暮れるほど、時間はとれない。もっぱら山岳写真や、アウトドアの雑誌

を見てストレスを発散していた。いつか行ける日を夢みて、知識だけは蓄えている。

ペーパーアウトドア派なのだ。

立て続けの葬式に、親戚の人たちも慣れ、てきぱきと物事が進んだ。蝉の死に急ぐ鳴き声や太陽の角度で知り得る、夏の終わりの季節感だけが、けだるさを感じさせた。その葬式で思いもよらなかったのは、父の仕事仲間がたくさん来てくれたことだった。自由が好きな父だったので、その方面の仲間がたくさんいたには違いないのだが、生前の父を慕っていたという事実、驚いてしまった。

僕の知らない父が、そこには存在していた。

海水浴の季節が過ぎ去った頃、父と母が暮らしていた伊東の家を片づけに、直子と麻衣を連れてやってきた。

家は伊東の駅から山の方に少し上がったところで、近くには会社の厚生施設が目立つ。坂が急なので車でもきつい。買い物など大変だったろう。でも日頃から、身体を動かしていないと人間ダメになってしまうと、言うのが口癖だった。今年もこの伊東で、いろいろな人たちが数え切れない思い出をつくったことだろう。祭りの後のような、脱力感のような空気を感じた。

この伊東の家に来たのは、数えるほどだった。新築の祝いの時と、夏の海水浴に数回来たくらいだろうか。あとは、仕事という大儀名分を掲げて、寄りつきもしなかった。直子と麻衣の方が、よく顔を出していたので、血のつながりなどあてにならないと、思っていたに違いない。

久しぶりに空気を通す室内。きれいに片付いていた。少し高台にあるので、窓からは太平洋を見ることができる。潮の香りが身体をリラックスさせてくれる。

父の好きな風景だった。

いいところだけど、手放すしかないと思っている。別荘に残しておこうとも思ったが、両親が残した空気を感じるのは、無関心だった僕には逆につらかった。ここを売って、マンションのローン返してしまおうかと、現実的なことも考えていた。

「おじいちゃんとおばあちゃんがいなくなっちゃったから、ここは麻衣のお家になるの？ 麻衣、ここに住みたいな？ 海が見えるし」

遠い海を見つめながら麻衣が言った。

「学校はどうするんだ？」

「転校すればいいじゃない。わたしは地方派なのよ。知らなかった？ 都内に住むなんていまどき時代遅れだって、テレビでも言っていたわ。学校なんてどこにでもあるんだから」

7歳にもなると生意気なことを言う。

でも、もっともだと思った。しかし僕にはその勇気がなかった。

妻の直子が助けてくれる。

「麻衣。お父さんには仕事があるのよ。ここからじゃ東京まで、通勤は大変でしょう」

「伊東支店ってないの？」

「あるわけないだろう。さあ整理整理、今日中に終わらないぞ」

仕事の話になったので、思わず逃げ腰になった。

「お父さんのお休み少ないもんね」

麻衣にはいつも痛いところをつかれてしまう。

父の荷物を整理していると、古いカメラバックの中から8ミリフィルムが出てきた。そういえば僕が小さい頃、父は8ミリフィルムをよく回していたっけ...

まだ、ビデオカメラなどない時代だった。フィルムはカセットタイプになったばかりで、音は磁気コーティングしてあるフィルムに録音する。ころもとないシステムだが、当時は高価なものだったのだ。

僕を撮ったものがたくさんあるようだ。少し斜めでなぐり書きの、父の字で書かれたタイトルが妙に懐かしい。『祥太3歳になりました』『祥太誕生』『初めてのプール(祥太)』『七五三』...小さな頃のものばかり、よく撮ったものだ。

僕が物心ついたとき、父は仕事に追われていた。仕事ばかりで家にはめったに帰らない。

僕はそんな父が嫌いだった。

父はフリーでテレビのディレクターをしていた。ドキュメンタリー番組の担当が多く、いつも地方や海外に行っていた。東京にいるときも編集作業があるらしく、家にはほとんど帰ることはなかった。

僕は口には出して言わなかったが、いつも寂しい思いをしていた。日曜日に友達が、父親とキャッチボールなどをしている姿を見つけると、逃げ回っていたのだ。といって父に、家にいてくれと言ったことなどない。自分で悩み、自分の中で感情を処理していた。気の弱さが、いつも自分を引っ込み思案にさせてしまっていた。

「お父さん、それなあに？」

麻衣が八ミリフィルムに興味をしめした。

「8ミリフィルムというんだ。昔の...映画みたいなものだよ」

「映画？」

「ビデオとは違って、スクリーンに映すんだよ。けっこう大きく映るんだぞ」

「へー。祥太ってお父さんのことでしょう。プールや七五三のときのもあるのね。見たいな！見たいな！」

麻衣が、まとわりついてくる。

仕方がないことだ。仕事が忙しくて麻衣と遊べる時間が少ない。昔、忙しい父が嫌いだったのに、自分が娘に対して忙しい父を演じてしまっている。そんな自分を責めずには、いられなかった。でも、どうしようもない現実には流されてしまっている。会社内にいるとそういう空気に包まれてしまうのだ。みんなそうしている。仕方がないことだと、弱気になってしまう。といって、今の時代、40近い男が仕事を変えるのは、並大抵のことではないと思う。

僕は音響機材をあつかっている会社の、営業部に所属している。得意先はテレビ局や劇場だ。テレビ局などは24時間営業なので、打ち合わせなども、24時間体制でするしかない。休日も昼休みもないにひとしい。新製品のデモをお願いする時は、付き添うのでスタジオに詰めるのも珍しいことではない。これがサラリーマンだ。

僕は、普通のサラリーマンになりたかったのだ。

父のように時間も収入もむらな仕事だけはしたくなかった。しかし、サラリーマンになってはみたが、仕事は忙しく時間はとられ、ストレスもたまる。安定しているのは、給料だけなのかもしれない。今になって自分勝手に見えた父が、逆にうらやましく思っていた。人間なんて回りのものが美しく見えてしまうものなのだろうか？ もしかしたら自分勝手に見えた父も、ストレスを感じていたのかもしれない。

麻衣といっしょにいる時間が少ない。その少ない時間を慕ってくる麻衣に、後ろめたさを感じずには、いられなかった。必要以上に甘くなる。

「よし、今日はやめだ。部屋の整理なんかやめて、映画大会にしよう」

麻衣はニコリと笑った。

「そうしよう。ねえ、お母さん、映画を見るって！ お父さんの小さい頃だよ」

直子もすぐに同意してくれた。

直子にはいつも悪いと思っている。一番悲しい思いをしているのは、直子ではないかと思うときがある。頼りにしている旦那が、家庭を振り向かないのだから始末に追えない。いや、振り向く気はある。振り向けないのだ。

中小企業の営業課長。社員が少ない分、労働時間が長くなってしまふ。

麻衣の父親参観にいけないときなど、直子がいまにも泣きそうな麻衣を説得して、直子が僕のかわりに出席するなど、迷惑のかけどうしだ。直子がいるから、今の僕も存在していると言ってもいいだろう。

「家の整理はそう急ぐ必要もないし、暇なときに麻衣とふたりでやりましょうね」

「うん、映画はお父さんがいるときじゃないと見られないもんね。お母さんは機械音痴だから。整理は、わたしたちにまかせてよ。ね、お父さん！」

はしゃいでいるふたりに、波長が合ったように僕も楽しくなってきた。

「よし、スクリーンを吊るぞ。麻衣、手伝ってくれ」

「ハイ」

元気のいい声が響いた。

スクリーンは丸めて押入の端に、しまわれていた。かびが生えていたら駄目だなと思いながら広げてみたが、多少シワがあるだけだったので、びっくりした。もしかしたら、入院前にスクリーンを広げて8ミリでも見たのだろうか？

映写機とスクリーンをセットしている間に、直子はおやつを用意してしてくれた。

「ようし、雨戸を閉めて暗くするぞ」

空気は動くのをやめ、束の間の暗闇が部屋を支配した。

「お父さん、かわいい！」

スクリーンからの光の反射で、浮かび上がった麻衣がはしゃいでいる。

「お母さんもこのフィルム見るの初めてよ。お父さん、よくとっておいたわよね」

直子も感心しながら見入っている。

ヨチヨチ歩きの僕。歩き初めの頃の映像だ。

僕も麻衣が初めて歩いたとき、父親としてすごく嬉しかった。五体満足なのはわかっているが、その答えを見せてもらっているようで嬉しかったのだ。

僕たち夫婦の初めての子供は、麻衣ではなかった。勘太という長男がいるはずであった。というのは直子のお腹にいるとき、臍帯ヘルニアという病気にかかってしまい、生まれてすぐに亡くなってしまったのだ。

それは妊娠6か月のときに、エコー検査でわかった。子供のお腹に大きな腫瘍が確認されたのだった。その腫瘍は、母親から栄養をもらっている臍の尾がゆるんで、内臓が臍の尾に出てきてしまっているのだという。助かる確率は30パーセント。助かったとしても障害がでるかもし

れない。臍の尾は子供にとって栄養原であるからだ。

「とにかく大きく育てて、臨月になったら帝王切開で取り出し、内臓を体内に押し戻す手術をしましょう」

と医者には言われた。

それから、初めての子供を助けようと僕たちは頑張った。でも直子は、時間がたつにつれ、不安をあらわにするようになった。

「どうして、助かるかどうかわからない子を、3か月近くも抱いていなくてはならないの？ 元気な赤ちゃんが生まれてくると思うからこそ、大きなお腹も苦にならないのに…」

男は子供を産むことはできないので、出産の体験はできない。でも、直子の不安は痛いほどよくわかった。

助かる確率を夢みるしかなかった。

妊娠8か月で破水。その日に帝王切開で長男が誕生した。

名前は前から決めていた勘太と命名した。しかし、状態は思っていたよりも悪く、体重は1600グラム、臍の尾は破裂しており、内臓はそのほとんどが体外にでていたのだった。

僕は担当医に呼ばれ、勘太のいる未熟児室に行った。ビニールのチューブが小さな鼻の中に押し込まれていた。それでも顔はかわいくやさしい、直子に似た顔立ちをしていた。

「はっきり言って、状態は悪いです。身体の一部の発育が止まっていますので、外科的処置をしても普通のお子さんのように是不会いでしょう。このまま外科的処置をせずに、見守ってあげてはどうかと思うのですが…」

医者が言っていることを、ひとつひとつ理解しながら聞いていた。

勘太をこのまま見守る？

見捨てるということか。

でも、どうしようもない現実が目の前にあった。僕は、せめて苦しませないように、よろしくお祈いしますと、頭を下げることしかできなかった。この世に生まれて、苦しむだけなんて悲しすぎる。

それから1時間後に勘太は眠るように息を引き取った。

病室にいる直子にやわらかく話をしようと努力したが、耐えきれず涙が落ちてしまった。直子は、予測していたらしく

「わかったわ…」

とうなずき、泣きつづけた。

母がその横でずっと付き添ってしてくれた。

父は一度も顔を出さなかったが、僕に言った。

「同じ悲しみを味わっちゃったな…」

…と

僕には妹がいた。1歳の時に小児癌で亡くなっていた。父も今の僕と同じような体験をしたと言いたかったのだろうか？ ならば、もっと近くにいてほしかった。あの時、僕は父に反感を持った。

フィルムの中の僕が転んだ。

麻衣は大きな声を張り上げた。

「あ、転んじゃった。さあ立つのよ。がんばって！」

「おいおい、スクリーンに向かって言ったってしょうがないだろう」

直子が僕に目で合図をする。

「いいじゃない、うれしいんだから」

と...

そのフィルムの中には、何十年前かの父の目から見た僕が写っていた。

僕が麻衣を見るように、父も僕のことを見ていたのだろう。そして、その時見ていたものがこの映像なのだと思うと、心にしみる。

僕の嫌いだった父も、父親だったのだ。

タイトルを頼りに、時代の流れでフィルムを見ていたが、1本だけ何も書かれていないフィルムがあった。まさかポルノではないだろうと思いながら、映写機にかける。仕事上のフィルムかもしれない。

いかがわしいフィルムだったら、何とか言い訳をして止めようと考えていた。

それには、山脈をバックに広がっている木々の中に、若い頃の父が写っていた。父の姿は、いままでのフィルムに一度も写っていなかったのでびっくりした。

麻衣もびっくりしたらしい。

「おじいちゃんだ。お父さんぐらいの時ね」

そう、今の僕ぐらいの年齢だろう。

フィルムの中の父は語りはじめた。

「おい、祥太。祥太がこのフィルムを見るかどうかはわからないが、俺は祥太に宝物を残してあげたいと思う。それも、この自然の中に。この自然は祥太がじじいになるまで、このままだろう。ここに、この宝物を埋めておく。時間をつくって家族といっしょに旅行がてら、捜しに来てみる。ちゃんと結婚しているのか？ 子供もいるんだろうな？ 俺にも孫ができるのかな？...とにかく、これは祥太にとって、最高の宝物だと思う。ここの場所は、自分で捜してみなさい。ヒントはこの画面だ」

宝物はプラスチックの容器に入っていた。それを、あらかじめ掘っておいた穴に埋めると、父はカメラに近づき、回りの風景を写し始めた。大きな山脈が映しだされた。父ひとりですべてのことなのだろう。

「祥太には難しいかもしれんな」

馬鹿にしたような、ひとりごとが記録されていた。カメラは360度回転して風景を記録していた。

見覚えのある山だった。

といっても、その場所には憶えがなかった。

「どこだろう。山の中のようだな」

麻衣が急に立ち上がった。

真剣な顔つきだ。

「わたし、ここ知っているわ」

「どこなの？」

直子と僕は、麻衣を見つめる。

「ほら、去年いっしょに行った八ヶ岳よ。あの場所も憶えているわ」

なるほど、山並みは八ヶ岳だ。でも、あの場所の記憶はなかった。

父は八ヶ岳が好きだった。本格的な山登りではなく、ハイキング程度の山歩きをしていた。僕も子供の頃連れていってもらった記憶がある。久しぶりに父が休みだと知って、いっしょに遊ぼうと思っていると、父は山に行くと言い出した。そんな父にせがんで、連れていってもらったのだ。足手まといになったかもしれないが、父は嫌な顔はしなかった。でも、僕のわがままで父の予定は相当狂っただろうと、子供ながらに思ったのを憶えている。

あれは、父と行った最初で最後の八ヶ岳だった。僕が山に興味を持ったのも、あの父と行った八ヶ岳からだろう。

そんな思い出があったので、去年の秋、麻衣を連れて八ヶ岳に行ってきた。もちろん、車とケーブルカーを利用しての観光コースだった。

僕は8ミリフィルムに写っていた場所を憶えていなかった。道案内は麻衣にまかせることにして、去年行ったあたりにもう一度行ってみることに話は進展していった。

直子もけっこうのってきたのだ。直子が話を進めだすと、とんとん拍子に決まる。ちょうど2週間先の金、土、日と3日間、休みがとれるスケジュールだったのも幸いした。麻衣も、開校記念日が含まれ連休だという。

普通ならば、そのままにしておく、自然に打ち合わせや出張の仕事が入ってしまう。その日は絶対に仕事をいれないと心に誓う。家族のため...そう思うことができた。

「よし、八ヶ岳に行くぞ」

「ハイ」

麻衣と直子は元気よく返事をした。

「ちょっとした、宝捜しね」

と直子。

「お父さんの宝物って何かしら？ おじいちゃんもやるわね。憎い憎い」

「でも、見つからないかもしれないぞ。昔の話だし、麻衣が知っている所といえ、観光客もたくさん来るところだろうしな。まあ、見つからなくても、みんなで家庭的なペンションにでも泊まってゆっくりするかな」

「そうね。でも、お父さんは忙しくて疲れているから、ペンションよりも旅館の方がいいんじゃない？」

と直子に言われたが、僕はあえてペンションをおした。というのは、僕の夢につながるからだ。僕の夢は、八ヶ岳にペンションを持つことなのだ。最近は実際の物件も目にしている。不動産屋の図面を見るだけでも、夢はどんどんとふくらんでいく。これも、山への憧れと同じく、知識だけはたっぷりと蓄積されている。

ペーパーオーナーだ。

学生の時の友達だった新城が、実家の新城不動産の後を継いでいるので、気兼ねなく相談することができる。最近リゾートの物件も扱っているのだ。友達なので足元は見ないし、無理に押しついたりもしなかった。今、とてもいい物件があり、八ヶ岳の大泉で8800万円。話次第

では、8000万円で購入できるという。住んでいるマンションを売って、ローンを組めば購入できない物件ではなかった。でも会社を辞めて、ペンション経営という冒険をする自信と度胸がなかった。

空想して知識ばかり蓄えているだけだった。

ペンション経営の夢を新城に話したら、不動産だけが現実性をおびてしまったというわけだ。実際の物件を見せられると心の奥ではハラハラしてしまう。

何はともあれ、金銭的に直子や麻衣を巻き込みたくはなかったのだ。もしうまくいかなかったら、家族3人借金地獄に落ちてしまうのは目に見えているからだ。忙しくても、サラリーマンは経済的には安定している。

空想を楽しんでいた。

僕はただ泊まるだけのペンションは考えていない。そこには何もなく、大自然が広がっているという素朴な所もいいのだが、もうひとつ自分なりのポリシーを持ちたいと思っている。

僕たちにも経験はあるのだが、結婚して子供ができると、その子が歩き出す頃まで旅行などには、なかなか行けない。乳児を連れていっても大丈夫な、ホテル・ペンションが限られているからだ。

中には子供お断りなどというところもある。

必要なのは、人の手を借りなくては生活できない、この世の中でハンデを持っている人たちが、楽しく宿泊できる場所だと思う。

僕たちの長男になるはずだった勘太も、状態がよければ、身体に障害をもって生まれてきたと思う。そういう子と頑張って生活している親もいるのだ。そういう人たちが旅行する楽しみ、自然とふれる楽しさを味わえたら嬉しいと思っている。けっして、喜びを与えるのではなく、共に感じたいという気持ちからだ。

勘太の生まれた病院で、両足が動かない6才の直樹くんと知り合った。直樹くんは階段など、自分が車椅子で移動できない時、恥ずかしがらずに回りの人たちに応援を求める。

立派なことだと思う。

よく直樹くんは言っていた。

「ぼくは生まれたときから足がないんだよ。ぼくにとって足がないのは、普通なんだ。だから恥ずかしいなんて、思わないことにしているんだ」

どのようにすれば、こう考えられるようになるのかわからないが、そう簡単に6才の子が言えることではないと思う。といって、わがままに助けを求めたりはしない。僕も車椅子を体験させてもらったが、1センチの段差を乗り越えるだけでも、大変な力が必要なのだ。そんなときには助けは呼べない。逆に何も知らない人たちに、反感を持たれてしまうことになる。直樹くんは、そのへんも十分承知していた。見た目では楽そうな所は、人の手を借りずに、真剣な目つきで頑張って動き回っていた。

これも回りの人の力だ。

負い目を感じて、外に出たくても出られない人たちはたくさんいる。僕の夢のペンションというスペースが、少しでも外に出るきっかけになってくれたら、嬉しいと思っている。甘いといわ

れるかもしれないが、儲からなくてもいい、人との出会いを大切にしたいと思っているのだ。

そういう意味でも、新城に紹介してもらったペンションは理想に近い気がしていた。図面でしか見ていないが、部屋の仕切りやドアに段がなく、車椅子が通しやすいのだ。後は2階への車椅子専用の昇降装置とトイレ、そして駐車場から玄関までの坂道を整備すればよさそうだった。この辺には温泉は出ないけれど、旅館やホテルに負けない、大きな露天風呂を作りたかった。自然を見ながら入る森林浴風呂がいいと思う。

今回の八ヶ岳行きは、その物件や他のペンションを見てみたいという気持ちがあったので、なお一層行く気になっていた。夢は夢のまま、膨らませておくのも楽しいものだ。

麻衣は父が残した宝物がいったいなんだろうと、あれこれ考えているようだった。でもその前に、どうやって捜すかが問題だ。カメラの設置位置が正確にわからないので、少しのずれが生じる。景色と照らしあわせたいので、フィルムから写真を引き延ばして、現地で当てはめてみた方がよさそうだ。それでも、手当たり次第に掘るわけにはいかない。

僕は提案した。

「捜し方が問題だな？ あの場所が見つかって、回りを片っ端に掘るわけにはいかないだろう？」

麻衣は得意げに言った。

「そんなこと簡単だよ。マシンを使えばいいのよ」

「どんな？」

「長くて細い棒を刺して捜せばいいのよ。あの箱にぶつかれば手ごたえがあるわ。そこを掘ればいいのよ」

直子は麻衣をほめた。

「そうね。麻衣は頭がいいわね。冴えているわ。棒ならば他の人に見られても、それほど怪しまれないわね。お父さんも埋めたのだから人が通らないところなのかもしれないわ」

「そうだな。バーベキュー用の長い串で大丈夫かもしれないな。いいぞ、麻衣」

麻衣は鼻高々に胸を張って見せた。

でも、内心は心配だった。直子が言うように父が埋めたのだから、人が通らないところだろうが、20年も前の話だ。今はどうなっているか見当もつかない。それにその場所を麻衣が知っているという。一度行った所だという。人の通らない所にいった覚えはない。勘違いということも考えられる。

「とにかく、去年行った所まで連れてって。そうしたら、あの場所を教えてあげる。それまでは秘密よ。おじいちゃんからのクイズを考えてあげて」

と麻衣が言った。

中央高速小淵沢インターチェンジを目指す。

直子は朝4時に起きて、弁当をバスケット一杯作ってきた。

「食べきれないんじゃないか？」

僕は直子に呆れて言った。

「余ったら夕食前のビールのつまみにするか、夜食にすればいいのよ。自然にふれるとお腹も減るわよ」

「そうそう、大は小をかねる。お腹がすいたら何もできないわ」

麻衣はすぐに直子の味方につく。

食事に対する執着は、僕の母ゆずりなのかもしれない。お腹が空いては考えることもできないだろうという考えの持ち主だった。子供の頃、外で友達と喧嘩をして怪我をさせてしまった時など、家に帰ってもすぐには怒られなかった。まず、ご飯を食べさせられてから、怒られる。もっとも、怒られることがわかっていたので、食事など喉を通らなかったが...

泊まるところは僕の希望どおりに、八ヶ岳の山好きのオーナーが経営しているペンションになった。そこには、山脈を眺めながら入ることができる露天風呂がある。また、そのオーナーは酒好きとあって、露天風呂に入りながら日本酒を飲むこともできるのだ。酒を飲むのに場所と時間は関係ないというポリシーの持ち主だという。

考えただけで、生きていてよかったというジワーとした感じを覚えた。八ヶ岳の話も聞くことができるし、食事も評判がいい。僕の心は、子供に戻ったようにワクワクしていた。

車は快適に走っている。金曜日の昼間なのですいているのだ。本来はこうでなくてはいけない。高速道路はあくまでも高速で走れなくては意味がない。

昔、ゴールデンウィークに東京から静岡まで出かけたときなど、家の前から道路は渋滞して、東名高速に入ったとたんに事故が重なり、現地までずっとノロノロ運転だった。おかげで直子とは喧嘩になるし、おまけに抜け道を間違えたりして、宿に着いたのは夜の8時になってしまった。冷めた食事を食べたのを憶えている。

日本人は盆と正月、ゴールデンウィークと集中休暇型だ。それがいけないとはいわないが、余裕がなくて寂しい思いをしているのは、僕たちだけではないだろう。

会社を休めない状況が、そこにはある。いくら、たてまえで有給休暇が何十日あるとしても、堂々と休むことは許されない。休めるとすれば、退職前の1~2か月にまとめて取ることしかできない。会社を休むということは罪悪なことなのだという、一種の日本的な社会現象になっている。僕の会社などはその典型的な例だ。

諸外国では1か月のバカンスなど当たり前だし、誰もとがめやしない。この間などは、アメリカのカンパニーに有利な契約で押し切られそうになった時でも、最終契約を延ばしてまで平気でバカンスに入ってしまった。おかげで契約内容の再確認もでき、こちらに有利な契約に持っていけた。上司は、遊んでばかりいるからだよと言っていたが、僕は自分たちの生活基盤を大切にしている姿勢に共感もてた。早く日本もそうになってほしいと思う。僕がやらなくてはならないと

思うが、今の会社で個人的にシュプレヒコールをあげても、だれも共感してくれないだろうし、敵対されるだけだ。辞めれば？　と言われかねない。

そんな中で、できるだけ休んで家族のために時間をつくりたかった。病気になったら、看病をしてくれるのは、まぎれもなく会社ではなくて、家族なのだから...そんな気持ちになっていた。

今日は天気も上々だった。

「もっと早く早く。あの車も追い越して！」

麻衣は御機嫌だ。

「八ヶ岳は逃げないよ。3日間あるんだ。ゆっくり行くぞ」

「お父さん。遊ぶときは徹底的に遊ばなくちゃ。少ない休みなんだから」

又、麻衣に言われる。しつこい性格をしているのは、母親ゆずりだろう。

直子は笑いながら、いたずらっぽい目で僕を見つめた。

家族っていいと思う。

小淵沢インターチェンジを降りて、八ヶ岳公園道路を右に曲がる。舗装はされているが、山道という感じになってきた。

左側には神秘的な八ヶ岳が見おろしている。去年、麻衣を牛に合わせた八ヶ岳の牧場は少し先だった。

確かこの辺に、新城が紹介してくれたペンションがあるはずだった。

「ちょっと、お父さん」

直子が後ろのシートから顔を出す。

「ちょっと、そこ左に入って！ あそこのペンション、素敵よ。売りに出ているみたいだから見ていかない？」

小さな看板が道沿いに『売りペンション』と書かれていた。

看板は草に半分ほど隠れている。

よく見つけたものだ。

直子はペンションに関心などないはずなのに、どうした心境の変化なのだろう。

車をそのペンションの前につける。

僕はびっくりした。ここが新城に紹介してもらったペンションだったからだ。

外観も僕のイメージぴったりの、ものだった。

いくら草に隠れた看板でも、出していたら誰かに買われてしまうかもしれない。自分では買えるわけないのに、心の中であせっていた。山の中にとけ込む、杉を使ったモダンな建物。手入れが行き届いている外観が、清潔感をかもしだしている。回りの建物と比較してみても見劣りしない。客室は6室ある。少人数で経営するには手ごろだろう。

前のオーナーは経営不振で売りに出したわけではなく、もっと人のいない所にペンションを建てたのだと、新城からは聞いている。ここらへんでも、人は多くなってきたのだろうか。確かに道路に近いし、静かな山奥を愛する人にとっては、うるさくなってきたのかもしれない。

麻衣が元気に言う。

「ここに泊まるの？　八ヶ岳のイメージそのものっていう感じだわ」

「残念だけど、ここは売り物だから泊まれないんだ。でもいい感じだよな。中央高速からはすぐだし、自然がいっぱい。あの2階の窓から見れば、富士山や南アルプスも見えるんじゃないかな」

僕はそのペンションを見上げて、買えるならこのような建物がいいと思っていた。早くも自分なりの改装計画が頭の中をよぎっている。空想はいつも先走りする。会社がつぶれてくれれば、本気になるかもしれないと思っていた。すぐに選択を他人にまかせてしまう。いけない癖だ。

「あなた、好きみたいね」

直子は僕の顔をのぞき込んで微笑んだ。

八ヶ岳公園道路を通り八ヶ岳高原ラインに入った。

そこには天女山がそびえたつ。

去年もここに来たのだ。

麻衣に言わせるとあのフィルムの景色は、絶対に天女山からのものだという。

天女山のパーキングに車を駐車して、登山道を歩いて登る。大体距離にして1キロぐらい。麻衣を連れていたので20分ぐらいの行程だった。

重い弁当はもちろん僕が持つ。

平日の金曜日でもたくさんの観光客がいた。でも、家族連れは少なく、バスの団体旅行であったり、会社の社員旅行だ。

天女山の展望台に着くと、山並みの大パノラマが、僕たちを刺激した。目のレンズが力を抜く感じをうける。天気が僕たちに味方をしてきているようだ。遠くに富士山、南アルプスが見える。秩父の山も迫力があつた。そして目の前に八ヶ岳連峰が迫っている。父もこの山並みと自然が好きだったのだ。

「あの8ミリの場所はどこかな？ この近く？ わからなくなったら、わからないでいいんだぞ。1回しか来ていないんだからな」

麻衣に責任を押しつけたくなかつた。でも、そんな僕のやさしさなど気にもしないで、麻衣は自信ありげに、下の方を指さした。

「この下よ。答えは去年お弁当を食べたところ」

言われてみると、そのような記憶が蘇ってきた。人が多くて弁当を広げる場所を捜した覚えがある。そして下に降りたっけ...？

登山道を外れて、ナラやカラマツの林を少し下がったところにその場所があつた。景色もあの父の8ミリとたいして変わっていないようだ。20年くらいでは、自然は変わらないのだろう。

ここは、登山道から離れているので人はいない。もしもここが父の8ミリの場所だとすると、無意識のうちに父が好きな場所を、僕たちも選んでいたことになる。偶然だが鳥肌が立った。

「よし、麻衣とお父さんは宝捜しだ。お母さんは弁当の用意をしてくれ。そう簡単に見つかることも限らないからな」

麻衣は長いバーベキューの串を持って土を刺し始めた。あの8ミリから引き延ばした写真を見ながら大体の場所を決めて捜した。この20年にここは開発されてはいないので、見つかるかもしれないと思いはじめていた。

僕も串を刺す。あのフィルムの場所あたりを...宝探しゲームだと思っけていても、宝が何なのかわからないだけに、不安は残っていた。

「お父さん、あつたよ！ ほら、ここ堅いわ。掘ってみようよ！」

麻衣が黄色い声を張り上げた。

でもそれは数回串を刺しただけで、ただの石だとわかつた。

「残念。でも絶対に、ここらへんなんだからね」

麻衣は必死に串を刺している。何が出るのを期待しているのだろうか？ 僕の子供の頃のおもちやとでも、思っているのだろうか？

「何だか、ブヨブヨしているものがある。これかしら？」

ブヨブヨしているとすると、プラスチックケースの可能性もある。

家から持ってきた園芸用のスコップで掘ってみると、地面から15センチぐらいのところからプラスチックのケースが出てきた。

「あった！」

僕たちは目を見合わせた。

「お母さんあったよ！」

大きな声で呼ぶ麻衣。直子はすっかり弁当を食べる体勢に入っていた。

麻衣が一生懸命に開けようとする。

蓋を開けるとビニール袋に何重にも包まれた原稿用紙が入っていた。

鉛筆で書かれた、大きな升目の原稿用紙。

それは小学校3年の時に書いたらしい、僕の作文だった。

タイトルは『大きくなったら』

直子も顔を近づけ、いっしょに読む。

麻衣は掘り当てたものが、ただの紙切れだと知ると、興奮も醒めたのか僕たちを見守っていた

。

大きくなったら

三年三組

大島祥太

ぼくは、大きくなったら家族を大切にしたいです。

ぼくのお父さんは、ほとんど家にいません。

お母さんは仕事だからしょうがないと言います。

でも、とてもさみしいです。

ぼくは自分の家族には、ぼくのようにさみしい気持ちにさせたくありません。

日曜日にはみんなでいっしょに遊べる仕事をしたいと思います。

父がどのような気持ちで、この作文を読んだのかと思うと...そして、どのような気持ちで埋めたのかと思うと...涙がこみあげてきた。

直子も涙ぐんでいる。

「お父さんは、この作文の気持ちを大切にしておしかったのかしら？ これってお父さんの仕事を否定しているわよね。考えると悲しくなっちゃう」

「でも、この作文を目にしても、父の生活は何ひとつ変わらなかったんだ」

「心の中では、悩んでいたんじゃないかしら。一番つらいことよ」

「そうかな...」

父は生活を変えてみたいと思っていたのかもしれない。でも変えられなかった。仕事を辞めて、ペンション経営をする夢を実現できないでいる自分にだぶらせていた。

父は僕も自分と同じように、家族をかえりみない人間になると考えていたのだろうか？ 子供が考えているほど大人の世界は簡単にいかないんだと、苦笑いをしていたのだろうか？

それとも、家族を大切にしたい人間になって欲しいというメッセージなのか？

僕たちの緊張感がつたわったのか、麻衣は黙って立ってられなくなり、僕と直子の間に割って入ってきた。

「ねえねえ、何なの？ 何って書いてあるの？ 見せて。麻衣にも見せてよ。麻衣が見つけたんだからね！」

直子は麻衣に言った。

「お父さんと大切な話があるから、少しひとりで遊んでいてちょうだい。あとでちゃんと説明するから。わかった？」

麻衣はつまらなそうに、少し離れてひとりで遊び始めた。素直にいうことを聞いたのは、僕たちが涙ぐんでいたからだろう。

「何も、麻衣をひとりにさせなくてもよかったのに...」

そんな僕の言葉など聞こえなかったように、直子は話し始めた。

「あなた。思いきって、さっきのペンションを買っちゃおうか？ 買って、わたしたちで経営してみようか？ 成功するような気がするんだけどな」

「え！」

僕はびっくりした。

なぜ、僕の作文を埋めた父の話から、ペンションを買う話に進展するのだろうか。

「知らないと思っていたの？ この間、新城さんから電話があった時、あなたがペンションを買いたがっていることを教えてもらったのよ。でも、新城さんに言われなくても、あなたの気持ちは前からわかってたわ。いっしょに住んでいるんだから、当たり前といえば当たり前だけど...でも、具体的に不動産を捜しているとは思わなかった。わたしたちに後ろめたさを感じながら仕事をしてたって、面白くないでしょう？ あなたは正直だから態度に出ちゃうのよ。わたしたちは家族なのよ。運命共同体なのよ。あなたが会社と家族のことで暗くなっていたら、こっちまで暗くなっちゃうわ。あなたの中にサラリーマンを辞めるということは、結局成功しなかった脱落者なんだという考えがあるのなら、それは違うと思う。こだわって会社の仕事にしがみついている方が楽なのよ。その仕事が楽しくなければ、その方が脱落者なんじゃないかしら」

僕の夢物語に、新城が勝手に捜してくれた物件だとは言えなくなった。

「でもペンションを購入して経営するということは、すごい冒険だと思うんだ。まして、僕たち素人がやるんだぜ」

「でも、やりたいんでしょう？ 誰でもはじめは素人よ。始めるのが早いかな遅いだけの違いだわ。遅く始めるのなら、頑張るしかないじゃない。一生懸命やればいいのよ。やってはいけない、なんてことはないんだし」

「そりゃ、今の会社の仕事より、やりがいはあると思うよ。でも、それをするにはお金だってかかるし、成功するともかぎらないんだよ」

「お金なんてどうにでもなると思うのよ。頭金は、お父さんたちには悪いけどあの伊東の家を処分したお金でまかなえるわ。わたしたちのマンションだって、売れば少しは現金になるんじゃないかしら。人生は一回きりよ。もしも失敗したら、売ってもう一度やり直せばいいじゃない。お父さんたちだって、きっと賛成してくれるわ。あなたは、やろうと思ったことは精一杯頑張る人なのよ。問題は、その環境を整えるまでが苦手なの。わたしたちのことを、ほっとかないで！ この問題はあなただけの問題ではないわ。わたしたちの大きな夢だと思うの。力をあわせて、現実に行きましょうよ。麻衣だったら大丈夫よ。わかってくれると思うから」

直子が大きく見えた。

いいパートナーなのだ。僕の一番苦手なところを知っている。やってみようという気にさせてくれた。

「ありがとう。そこまで言ってくれるなら、具体的に考えてみよう。最善の方法をね」

「そうよ。そうこなくっちゃ」

直子は麻衣を呼んだ。

走って近づいてくる麻衣。

不安そうだ。

「お父さんが、さっきのペンションを買って、こっちで暮らさないかって？ 麻衣はどう思う？」

麻衣は、嫌な話じゃなくてよかったという明るい顔を見せた。隠せない表情が可愛かった。

「賛成！ いつも八ヶ岳を見られるなんて、最高だわ」

と、僕の顔を見上げた。

「自然ばかりだぞ」

「お父さんとお母さんが、いつもいっしょにいられるわ。これっていいことよ。でも、ひとつだけお願いがあるんだけど」

「何だい？...」

僕と直子はびっくりした。麻衣は、あまり自分からお願いはしない子なのだ。

「わたし、ひとりっ子はいやなの。兄弟が欲しいの。大切に作るから赤ちゃんをお願い」

僕と直子は、顔を見合わせて微笑んだ。

「話は、決まったわね。本当に前向きに考えてもいいんじゃないかしら」

「赤ちゃん？ ペンション？」

「両方よ」

麻衣が口をはさむ。

僕は直子に照れ笑いをみせた。

麻衣は僕と直子の手にはぶら下がりながら、身体をあずけてきた。僕たちみたいな親でも、麻衣から見れば頼もしい親なのだろうか？

「お父さん、わたしこっちでたくさんお友達をつくるわ。東京のお友達もたくさん呼んであげたい。ようやく人間らしい生活ができるわ」

「生意気、言うんじゃないの！」

直子は麻衣のおでこをつつきながら、笑う。

何だかつかえていたものが、スーととれたような気がした。心の開放感は、八ヶ岳の自然の中にいるからだけではなさそうだ。

これから忙しくなると思うが、心はうきうきしていた。

「よし、弁当を食べたら、さっきのペンションをもう一度見に行くか！」

「ハイ」

元気よくふたりは返事をした。

父が求めていたものを、少しでも見つけられたような気がした。

父が僕に残してくれた宝物...それによって生まれるかもしれない僕たちのペンションを、麻衣の宝物にしてあげられたらいいなと思っていた。

そして、あの山脈の前で、ひとり8ミリフィルムを回している父を、時を越えて覗いた気分になっていた。